

1. 授業概要

「日本語学特講」は、3回生を主たる対象学生とした専門教育選択科目である。2023年度の開講時期、教室、登録学生数は以下の通りである。

【開講時期】3年後期（月曜2限）

【教室】401講義室

【登録学生数】20名（中等国語4名、小サブコース15名、留学生1名）

受講学生は、中学（国語）、高校（国語）の免許取得を目指す学生である。加えて、今期は、報告者が担任を務める特別聴講生（留学生）1名も受講した。登録した学生は、教育実習や病気による欠席を除き、全員授業に出席しており、単位修得できるレベルに到達していた。

本科目の授業の目的は、以下の通りである。

- ・ 小学校教員、中学校・高校の国語科教員として身につけておくべき日本語の概要を学んだ学生が、日本語の語彙分野について、深い知識を得、その分析法・研究法を学ぶ。

本科目は、日本語の語彙分野を対象とし、その分析法・研究法を学ぶことを目指したものである。ちなみに、2年前期開講の「日本語研究」では、日本語の文法分野を対象とし、両科目を受講することで日本語を体系的に学修できるよう工夫している（日本語の音声・音韻分野は、「日本語概説」の中で時間を確保している）。

授業の到達目標は、以下の通りである。

- (1) 語彙とは何か、語の意味とはどういうものかについて他者に説明できる。〔知識及び技能〕
- (2) 日本語について、類義語の分析ができる。〔思考力・判断力・表現力等〕
- (3) 日本語の語彙・意味についての知識を、国語教育に生かすことができる。〔思考力・判断力・表現力等〕

(4) 日本語に関わる事象について、強い興味・関心をもち、自ら調査・分析してみたいと思うようになる。〔学びに向かう力、人間性等〕

現行の学習指導要領に合わせ、〔知識及び技能〕、〔思考力、判断力、表現力等〕、〔学びに向かう力、人間性等〕に分類し整理した。シラバスに掲載した授業概要は、以下の通りである。

- ・ 語彙及び語彙論とは何かを概観した後、語彙の形態的な構造、語種などを学ぶ。次に意味とは何かを確認し、意味の構造を国語辞書の記述なども参照しつつ整理する。さらに類義語の調査を通して、語の分析方法を習得する。以上を通して、語彙・意味に関して国語教師として必要な知識と心構えを学ぶ。
- ・ 授業中も、Google Forms やGoogle Slid e 等を活用することがあるため、インターネットに接続できるiPad やノートパソコン、Chromebook 等を用意すること（スマートフォンからも接続できるが画面が小さいため、画面が大きいICT機器を活用することを勧める）

Google form をはじめとしたICT機器を活用することを述べている。実際の授業では、Slido も使い、授業中の意見集約を行い、受講生から好評を得た。

本科目の授業スケジュールは、以下の通りである。

- | | |
|------|----------|
| 第01回 | 語彙と語彙論 |
| 第02回 | 日本語語彙の構造 |
| 第03回 | 語種と語種意識 |
| 第04回 | 語構成 |
| 第05回 | 語の意味 |
| 第06回 | 意味分析の方法 |
| 第07回 | 同義語/類義語 |
| 第08回 | 辞書の意味記述 |
| 第09回 | 意味変化 |
| 第10回 | 慣用語 |

- 第11回 類義語の分析（発表）1
- 第12回 類義語の分析（発表）2
- 第13回 類義語の分析（発表）3
- 第14回 日本語語彙の歴史
- 第15回 日本語語彙研究と国語教育

まず、第1・2回で、日本語語彙の全体像を整理した。そして、第3～10回で、語種、語構成、意味、意味分析、同義語/類義語、辞書、意味変化、慣用句といった日本語語彙の各論を展開した。第11～13回では、これまでの学修を踏まえ、3～4名で班をつくり、自ら類義語を選定、調査、分析した結果を報告させた（班分けは教員が行った）。その後、第14回では日本語語彙の歴史を、第15回では学習指導要領や教科書における語彙の記述を読み、国語教育との関わりを取り上げた。

授業資料は、基本的にパワーポイントによるスライドを提示し、必要に応じて紙媒体で補足資料を配付した。受講生はラップトップやiPadなどのICT機器を持参していることから、授業前に、pdf化した資料をMoodle上にアップし、各自ダウンロードできるようにした。授業中の机間指導の際、ほとんどの学生が、ダウンロードした資料を各自のラップトップ画面に表示して確認したり、Goodnoteに読み込んだうえで、書き込みを行ったりしていた。

毎回の授業は、概ね以下の通り展開した。

- ①教員が課題を提示し、個人で取り組む（1～2分）
- ②学生同士で話し合い活動を行う（教員は机間指導）（2～10分）
- ③学生による発表（2～5分）
- ④教員による補足説明（2～5分）

①～④の活動をワンセットとし、それをテーマ毎に繰り返す形で展開した。内容によっては盛り上がったため、多少の時間超過が生じたこともあったが、概ね予定通りの時間で展開することができた。

成績評価方法は、毎回の授業中に課す課題への取り組みと授業後に課す大福帳（ミニッツペーパー）への記入内容が60%、第11～13回時の発表及び発表資料の内容40%である。

2. 授業評価の方法

本科目では、第15回授業時（2024/02/05）に、自由記述によるアンケート調査を実施した。質問内容は以下の通りである。

- ・15回の授業を振り返り、日本語の語彙について考えたことや授業の感想を述べてください。

アンケート用紙には、「日本語の語彙について考えたこと」「授業の感想」を記入する欄を別々に設けた。なお、当日は20名中18名が出席した。

3. 結果

アンケート結果を示す。「日本語の語彙について考えたこと」と「授業の感想」を分けて示す。

3.1. 日本語の語彙について考えたこと

本講義を通して日本語の語彙について考えたことを尋ねた。回答の一部を紹介する。小見出しはいずれも報告者がつけた。

語彙そのもの

- ・途中3回の授業で学生の発表をおこなったが、そこで発表された単語はどれも辞書的な意味と普段私たちが使用している意味に少しずつ差があり、日本語の言語ははっきりとその形が分かるものではないのかもしれないと考えた。スライムのようなイメージがある。
- ・語の起源を辿ると一つの語として今日使っている「なべ」のような言葉も合成されたものであったり、意味の面では一つの語から複数の意味が生まれ次第に定着することで日頃つかっている日本語がつながっているのだということはとても興味深いと感じた。
- ・日本語を分析するには、通時的な視点が必要となりいつから生まれたのか、また、いつから一般化したものなのかも含め行う必要があると理解できた。また、実際に分析をしてみて、様々な使用場面があることに気づけた。接続を考えるとときには意味が通るのか、文法的に正しいのかの2つを分けて考える必要があると分かった。

語彙と教育の関係

- ・教育における語彙の位置付けや、語彙を学ぶことの意義について考えた。語彙は国語科内だけで活用されるものではなく、他教科、また社会に出た後も必要になる。そのことを踏まえて、授業で語彙能力を高められるようにした。

生活や授業で言葉を扱うことへの自覚・責任

- ・特に辞書的な意味のみではなかなか生活していくことが難しいという点については発表を聴く中で思ったことであるが、実際に教員になってからも子どもたちが実用的に語彙を使えるように工夫していきたいと思った。
- ・教科書や辞書に載っているものはあくまでその語の一部でしかなく、言葉で説明されない多くの部分が余っている。授業を実践する時にはこの触れられていない部分を自分が口にすることで、子どもたちも安心するのではないかと感じた。
- ・類義語の発表を通して、この授業を受ける前は何も考えずに似ている表現を使っていたが、言葉が違うということはそれなりの解釈やニュアンスの違いがあることを考えるようになった。他人の発する言葉に対して感じたので、私自身の言葉についても責任と意味を持って発したいと思った。

日本語非母語話者への視点

- ・日本語の難しさは、普段意識することはあまりないが、この授業ではしっかりと痛感させられた。日本語が日々上達しているバイト仲間のネパール人にもっと敬意を表したい。

3.2. 授業の感想

本講義の感想の一部を紹介する。

授業中の話し合い活動

- ・話し合いなどが授業中何度もあり、資料を見てのインプット、話し合いでのアウトプットの循環があつて良かった。
- ・途中で話し合いの時間があつてリフレッシュできた。

授業資料

- ・分かりやすいスライドと説明で頭にスッと入ってくる授業でした。

発表

- ・上記の日本語の語彙についての学びとともに、発表の演習を通して学術的な分析を行うとはどういうことか、資料や、調査データの扱い方はどうすべきか、手法の妥当性など大切なことを学べたと思う。知識だけでなく技術を学ぶことができ有意義な学習になったように思う。
- ・実際に意味分析を行うことで、日本語の辞書的な意味だけでなく品詞や接続が可能かどうかにも視点を向けることができた。単語だけでなく、文全体としての意味を捉える大切さを確認することができた。

今後

- ・15回の授業を受けて、「これがあるからあの時こうだったのか」と気づくことが何度もあった。バイト先の塾でも、小学生に言葉について聞かれた時に答えられたことも嬉しかった。「こう書かれているけど実際こうだよ。でも色々なものを見るとこういうことが分かるんだよ」と前提と補足ができる人間になりたい。

4. 考察

本講義で取り上げた語彙についてのアンケートでは、「語彙そのもの」について理解を深めただけでなく、「語彙と教育」「生活や授業で言葉を扱うことへの自覚・責任」といった、教育に絡めた形で学修したことが窺える回答がみられた。また、アルバイト先の日本語非母語話者に対して敬意を表すという、他者理解を考える契機となった受講生がいたことが分かった。本講義は、国語教育を意識することが求められており、受講生のモチベーションにも関わるものであるため、アンケートの回答内容については、今後、工夫して取り上げていく必要があると考える。

授業の感想では、話し合い活動が受講生にとって有効であったことが分かった。また、類義語の発表機会を設けたことで、言語分析の方法や言葉により深く迫るために必要や視点を実践的に獲得できたことが窺える。理論を示すだけでなく、具体的な言葉を用いて考えさせることが大切であることが分かる。なお、授業で学修したことをアルバイト先で活かすことができたという感想もあり、学修内

容を実生活に還元していることも窺えた。

自由記述式の回答であるためか、おおむね好意的な内容に偏っているが、授業展開はおおむね受け入れられているものとして評価した。ただし、報告者自身、内容面で不十分だったところがあったため、テーマ内容の精査を行っていく必要がある。そのため、今期の授業形態を基本としつつ、一つひとつのテーマを精査し、ブラッシュアップしていきたい。

5. おわりに

本科目では、小テーマを数多く用意し、学びのルーティーンを用意して課題に取り組ませた。いわばパターン化した展開であるが、受講生にとっては、ある程度授業展開のパターンが決まっている方が学修しやすかったようである。とはいえ、ある回では途中で映像資料を取り入れるなどしたことに対し、好意的な反応があったため、時々ルーティーンを崩し、飽きさせない、メリハリをつけた授業を行うことも大切であると考えます。

「活動あって学びなし」では困るが、講義中心の授業展開になりがちな本科目においては、適度に言語活動を取り入れることが重要であることを再認識する機会となった。

今後の授業改善に繋げていきたい。